



Title	「ノ・ダノ」並列の変遷：例示並列形としての位置づけについて
Author(s)	岩田, 美穂
Citation	語文. 2007, 89, p. 48-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69097
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ノ・ダノ」並列の変遷

——例示並列形式としての位置づけについて——

岩 田 美 穂

一、はじめに

現代日本語において、一文中に複数の要素を対等な関係で並列・列挙するための形式の一つに、次のような「ノ・ダノ」がある。^①

- (1) a. 彼の机の上には、書類だの文房具だのが散乱している。
b. 彼女はグッチだのブラダだの、ブランド品ばかりを買っている。
c. それを言ったの聞いてないのと喧嘩しても、問題の解決にはならない。
d. 期間限定だのおまけ付きだのと言われると、つい買いたくなってしまふ。
e. 太郎は学校に來ないで、遊びに行くだの飲み歩くだのしてばかりいる。

現代語におけるこのような形式には、他に「タリ」「ナリ」「ヤラ」「トカ」がある。これらはいずれも、背景として想定される事態に含まれる要素の中から任意にいくつかを取り上げ述べる、という「例示」の意味を持っているという点で共通している(寺村一九八五、一九九一参照)。

歴史的にみると、これらの形式はもとも並列の機能を持っていたわけではなく、室町期から江戸期にかけて別々の機能を持った形態からそれぞれ発達してきたものである。このうち「タリ」「ナリ」はアスペクト助動詞とコピュラ助動詞の終止形、「ヤラ」「トカ」は疑問(不定)を表す「ヤラナン」「ト＋カ」の複合形態を出自としている。これらはいずれも、主節に対する注釈句を作る形式になるという共通した段階を経て並列形式へと変化しており、この特徴が例示並列形式への発達に大きく関係していると考えられる(Kinuhata (to appear) 岩田(二〇〇七)参照)。一方で、今回取り上げる「ノ・ダノ」は、おそらく連体助詞「ノ」

を出自としており、引用句を作る助詞「ト」の機能に支えられた構文がその変化に関係していると思われる。この点で、「ノ・ダノ」の歴史的变化は、他の「タリ」「ナリ」「ヤラ」「トカ」とは異なった特徴を持っていると言える。

したがって、「ノ・ダノ」が他の形式と比べてどのような位置づけができるのかということは、例示並列形式を体系的に整理していく上で、一つの問題となる。そこで今回は、この「ノ・ダノ」形式を取り上げ、その歴史的な変遷について考察していきたい。(以下ノ・ダノによる並列をノ・ダノ並列と言う。)

二、現代語におけるノ・ダノ

歴史的変遷について見る前に、現代語におけるノ・ダノ並列の特徴について軽くおさえておきたい。鈴木(二〇〇四)では、現代語におけるノ・ダノについて「当該の事態を望ましくないもの、または心理的距離のあるものとしてとらえ述べる際に、その例となる顕著な事物を並列的に列挙し例示する」意味の特徴があると指摘されている。

(2) ? a. 学校では、日本語だのの数学だのを勉強している。

b. 学校では、日本語だのの数学だのを嫌々ながら勉強させられている。

(3) a. 子どもの頃、家の庭には、松だの梅だのが植えられていたものだが、今ではすっかりなくなっちゃった。

b. 夏休みには、火花だのキャンプだのの楽しみな予定がたくさんある。

? c. 今日はデートだの飲み会だのの楽しみな予定がたくさんある。

また、「形式を省略することができない」、「ノは名詞には使えない」などの特徴も指摘されている。

(4) * a. 新学期に入ると教科書だのの定期φを買わなければならず、

* b. まずいφきらいだのと夫は料理に文句ばかり言うている。

(5) * a. 彼の机の上には、書類の文房具のが散乱している。

* b. グッチのプラダの、ブランド品ばかり買っている。

ノ・ダノ並列句の統語的な振る舞いとしては、名詞句となる場合(1a)、修飾句(連体修飾句、副詞句)となる場合(1b、

c)、引用句になる場合、(1d)、「スル」を伴い動詞句となる場合(1e)がある。特に、引用句として使用されるのが、他の例示並列形式には見られない特徴である。また、(1e)のような

「スル」を伴って動詞句になる例はそれほど多くなく、不自然ではないにしろあまり生産的には使われないようである。

ノ・ダノ並列が、構文として他の例示並列形式と著しく異なる点は、並列句内部に含むことが出来る要素にある。他の形式は、

並列句内部に南(一九七五)による文構造階層の時制を除くB段階までを内包することができ、テンスやモダリティなどの要素は

含むことができない(森山一九九五、一三〇頁参照)。ところが、ノ・ダノ並列は、テンスやモダリティだけでなく、終助詞、つまりD段階までふくむことができる。

(6) a. フランスに行ったただのダイヤの指輪を買ったのだ

(と) 自慢を聞かされるとうんざりする。

b. 彼は、今年のワールドカップはドイツが優勝するだ

の、ジダンが怪我をしているにちがいないのだ(と)

知ったようなことを言う。

c. あの人が、頼むよだの何とかしてくれだの(と)し

つこく言ってくるので困る。

ノ・ダノ並列句は、助詞「ト」と共起することが多い。このD段階までの要素を含むことができるというのは助詞「ト」の特徴であると言えるが、(6)にあげた例では、助詞「ト」の有無で文意は全く変わらない。つまり、ノ・ダノ並列句は、助詞「ト」を伴わなくてもそれと全く同じ構文的な機能を果たすことができる、ということになる。

三 中世から近世にかけてのノ・ダノ

三・一 上接語の変遷及び形式の変化 — 手塚(一九六

八)より—

これまで「ノ・ダノ」と一括して表記してきたが、「ダノ」は「ノ」にコンピュータの「ダ」が付いてできたもので、コンピュータに

「ダ」が選択されていることから分かるように、「ダノ」が形式化したのは比較的新しく、明治期以降の東京語においてである。歴史的にはまずノによる並列(以下、ノ並列と表記)から始まり、用例が見られるようになるのは、室町中期あたりからである。では、室町中期からのノ並列について見ていく。

(7) a. 日本ニハ裳ノヒノ袴ノナント、云テヒキスルハイワ

レモナイ事ツ (史記抄七、二一九ウ)

b. 晋陶弘景梁劉道原ナント、云フモノハ皆迹ヲクラマ

シ名ヲ隠シテ山ニハイリイタヲ、後ニ神仙伝ノ列仙

伝ノ神仙通鑑ノナント、云タツ (史記抄十、四ウ)

(8) a. 吏ヲヤリテアソコヘ行ケコ、ヘ行ケ年貢ノナント

云テセムルツ (蒙求抄十、五〇オ)

b. 何ノカンノトハ問テセツカハセヌツ

(同十、四一ウ)

室町中期には右にあげた程度の用例しかなく、ごく限られたものであるが、室町後期には比較的まとまった数の用例を見ることができるようになる。

(9) a. 比叡の山わ、なんのかのと言うて (nanno cano to yūte) 同心せず。(天草版平家物語、二・二二一)

b. 五日、六日は日が悪いわ、何のかのと言うて (nan-no cano to yūte)

(同、四・二五四)

c. 学問をするにわ、明日の明年のなどのぶるわ、

(天草版金句集、一五三)

(10) a. かさかけのこまくらべのと仰せられて、上々の御てうあいなさるゝ物で御さるが、

(虎明本狂言、牛馬、上・一二三)

b. 京のものがなんのかのと申した時は、それであらふと思ふたが、

(同、すえひろがり、上・七三)

この室町後期には既に次の(11)のように、動詞(句)を並列できるようにもなっている。また、かなり早い例となるが、(12)のように「コピュラノ」の形も見られる。

(11) a. あの谷からしゝがづる、あのもりからむら鳥がくるの、あそこな谷は、人がなひに依て鳥があらす、と云て、
(虎明本狂言、きつねづか、中・一三八)

b. 誠に人は、いやとしをとるの、正月用意のと仰られて、にぎやかに御さるが

(12) ながは長の字、みつはひかる、長光じゃの、霜月しはすの比、こほりの上にうす雪のさつとふりかゝりたる、など、右のごとくいふ所で、

(同、ながみつ、下・九)

室町期の例を見ると、ノは元々名詞に付くことができたことがわかる。また、現代語では形式を省略できないというのが特徴として指摘されていたが、室町期には(11a)や(12)のような例がいくつも見られ、必ずしも並列される全ての要素にノが付くと
言うわけではない。

ノが取る上接要素に注目してノからダノへの形式の変遷を考察した手塚(一九六八)によれば、ノは元々名詞(体言)のみを受けるものであったが、江戸初期頃(手塚の分類では第二期)に文相当句を受けるようになり、江戸中期頃(第三期)には「文を受ける」という意識から名詞を受ける場合にはコピュラがつくようになる。さらに、明治期(第四期)に入ると、ノがコピュラを取り込んだ形の「ダノ」で再分析されて形式化し、コピュラを必要としない動詞句にもダノが付くようになる、という変遷を辿るという。ノ並列句が、積極的にコピュラを取り入れ、更にコピュラを取り込んだ形で再分析されるのは、手塚(一九六八)も指摘するように、連体助詞「ノ」との同音衝突を避ける意識が働いたためであると考えられる。現代語において名詞にノが付けないという特徴もこの変遷過程から説明できる。

手塚の言う文相当句とは本稿での動詞句を指すが、先に見たように、室町後期には既に動詞句を取る例が見られ、さらにコピュラのついた例も見られるため、若干の时期的修正が加えられる。しかし、手塚(一九六八)の指摘する上接語の変遷過程は注目される。元々語レベルのものしか取らなかったものから句を取れるようになる、という変化は、「タリ」や「ナリ」など他の形式にも共通する変化の方向であるからだ。つまり、並列形式はいずれも、初めから句を並列できたわけではなく、まず語を並列する用法を獲得し、そこから徐々に句へと拡張していったことができる。

三・二 統語的ふるまい

次に構文的な側面に注目してノの変遷を見ていきたい。

室町期に見られるノ並列は、(7)から(12)の用例のように、四一例中、三五例が「AノBノト言ウ」という、発話・思考動詞が続く引用句になり、四例が「AノBノト動詞」という副詞句となっている(13)。また、わずかに二例、「AノBノトイウ」がいわゆる形式名詞の「コト」の連体修飾句となるものもある(14)。

(13) あのうつくしひおとこを、なんのかのとたぶらかひて、かみをそつたほどに、

(しゅじやう、中・三四二)

(14) いづれの詩歌にも、きかりがねの、そかりがねのと申事は候まひぞ (かりがね、上・五二)

江戸期に入ると、例えば初期の近松浄瑠璃類では、三二例中七例が引用句、八例が副詞句、九例が連体修飾句、後期の上方洒落本類では、三〇例中一二例が引用句、五例が副詞句、六例が連体修飾句というように、室町期に比べて副詞句や連体修飾句の用法の比率が増えてくる。

(15) a. こちが取沙汰なんのかのと、親仁に告げるいやさに、

(生玉心中、二・三四三)

b. 追ひ出すの、勘当のと、酷う辛う当たりしは、継父のこなたに、可愛がつてもらひたさ。

(女殺油地獄、一・二四五)

c. 詮議にあうて牢櫃の、繩にかゝるのといふ恥と、この恥とかへらるか。 (冥土の飛脚、一・一三三)

(16) a. まだかばうのなんのといひなます。

(阿蘭陀鏡、一七・九七)

b. なんじや苦勞をしたのはの。義理があるはのと。恩にきせたらしい。 (北川蜷殻、一七・三五八)

c. 木津甚じやの。藤要じやのと。皆女才ない茶屋じやよつて (深色狭睡夢、一七・三三二)

室町期において、「AノBノト発話動詞」となる例が圧倒的に多いことからみて、もともとノ並列句は、「ト」を伴って引用句となるのが最も典型的な用法であったとみられる。並列される要素A、Bは発話内容であり、形式化したノの最初の機能は異なった複数の発話内容の一つの引用構文内で実現することであったと考えられる。

引用句以外の副詞句や連体修飾句もやはり「ト」を伴っており、広い意味での引用文に含めることができるものばかりである。これらは「AノBノト発話動詞」という典型的な引用句の用法を基にして、「ト」を持つ他の構文にもノ並列句が使用されるようになったということであろう。二節で述べたように、現代語においても(ダノ)は助詞「ト」と共起することが多いが、義務的なものではなく、「ト」がなくても(ダノ)並列句は「ト」句と同じ統語的な働きをすることができる。しかし、室町期におけるノ並列は、調査した範囲では「ト」が付かない例は見あたらず、江

戸期においても、一〇〇例余りの用例中「ト」が共起しない例は(17)にあげたわずか四例であり、依然として共起率はかなり高い。つまり、ノ並列句はもともと「並列する」という機能のみを持ち、並列句自体の文中における他の統語的な機能は助詞「ト」に依存したものであったと考えられる。

(17) a. 総じてそなたもこんな時、どうなされ、かうなされの、主あしらひが聞えぬ。(五十忌念仏、一・一八)

b. 鬻付け買ふの、帯買ふの、杏の錢まで続けた。

c. 何のかの言ふ内に、もふ爰じや。(丹波与作待夜こむろぶし、一・三五九)

d. 悉ら皮膚じやわいの、関取じやわいの、そんな事を言ふ者があつてたまる物かいのふ(恋相場箕請入札、二九・一〇)

(同、二九・一〇五)

「ト」が付かない例が比較的多く見られるようになるのは、明治期(東京語)以降になってからである。手塚(一九六八)は、トが脱落しにくかったことに対して、「並列助詞としての確立が遅れた」としているが、「並列」という機能と、統語的な機能とは別物であり、並列形式として確立していなかったと見る必要はないだろう。そのことは、江戸期に次のような名詞句になっていると思われる例が見られることから窺える。名詞句になるこれらの例は、「ト」の構文的機能の延長とは考えにくく、ノ並列句が独自に拡張させた領域であると言える。

(18)

a. 定家の家隆のは、こゝもとでたび／＼うけたまはる間、羅生門のシテが所望申たい

(当世くちまね笑、五・一六四)

b. なんのかがやかましい。ちよつと隠れて、会ひと

もない(丹波与作待夜のこむろぶし、一・三七〇)

c. いかな下人、下郎でも、踏むの蹴るのはせぬこと。

(女殺油地獄、一・二三四)

以上のような状況を見れば、現代語において、ノ(ダノ)並列句が、「ト」が省略されても付された場合と同じ機能が果たせるのは、室町期から江戸期にかけてのノ並列句と「ト」との密接な関係から、「ト」の機能がノ並列句に焼き付き、省略することが可能になったのだと考えられる。トが比較的容易に落ちるようになったと思われる明治期以降は、「ダノ」が形式化した時期であることを考えると、江戸期の「ト」との共起率の高さは、「ト」が並列形式と連体助詞「ノ」とを区別するための目印となっていた現れではないだろうか。

四 ノ並列句の位置づけ

三節で見たように、ノ並列句には歴史的に見ても助詞「ト」による構文が密接に関係しており、現代語における引用句になる例は言うまでもなく、副詞句や連体修飾句となる例も、もともとは助詞「ト」による構文の一種であり、その「ト」が省略されたものであらうと考えられることをみてきた。では、この助詞「ト」

による構文と、ノが例示並列形式としての発達したことはどのように関係しているのだろうか。また、助詞「ト」の機能に依存しないと思われる名詞句としてのノ並列句はどのように説明できるのだろうか。これらの点を通して、本節では、ノ並列が他の例示並列形式と比べてどのような位置づけができるのか考えてみたい。

四・一 引用と例示

引用とはどのような行為か、ということについては、さまざまに議論のあるところであるが、砂川（一九八八）等が「場の二重性」と表現するように、引用される元発話が起こった場面¹とその発話を引用し伝達する場面²の二層構造で捉える、というのが基本的な考え方である。鎌田（二〇〇〇）では、元発話を完全に復元することは不可能であり、直接引用であれ間接引用であれ、引用とは、伝達場面²における話者²が元発話を再構築する（生成する）ものである、と考えられている。

常識的に考えると、場面¹で起こった発話は引用される元発話ひとのみであるということはある得ない。複数の発話（あるいは複数人の発話）の中で話者²が場面²において伝達したい発話を取り上げて述べているにすぎない。つまり、引用という行為の中に既に複数あるものの中から任意に取り上げて述べる、という例示の基本的な機能が、暗黙のうちに含まれているのである。そして通常は一つ取り上げられる元発話を二つ以上取り上げようとしたが、ノ並列であると考えられる。したがって、引用するこ

とと例示することはそれほどかけ離れた存在ではなく、引用句を基盤に例示並列形式が発達することは可能性としては十分にあったと言える。⁽⁶⁾

四・二 統語的変化の方向性

例示並列形式と考えられるものには、「ノ（ダノ）」の他に「タリ」「ナリ」「ヤラ」などがあるが、これらは発達の时期的差はあるものの、共通する方向性がある。ごく簡単に整理すると（19）のようになる。（20）に具体例を示す（ナリで代表させる）。

(19) i 文末要素

ii (主節に対する) 注釈句を構成する

iii 文中の一要素に対する注釈句(修飾句)を構成する

iv 名詞句、動詞句(述語句)を構成する

(20) i 凡夫ノ習ノウタテサハ、思ハジトスレドモ、恨ミラ

レン事モ時々有ツルナリ。(延慶本平家 上・四五)

ii 二刀させば、内甲も痛手なり、ついに討たれた。

(天草版平家物語、四・三四八)

iii 手書なり絵書なり、小さいくはきいて有。

(相模入道千足大)

iv 千代子の言語なり挙動なりが時に猛烈に見えるのは

… (彼岸過迄)

ii では「内甲も痛手である」ということが主節事態「討たれた」の理由となる注釈句となっている。並列句を作るようになる

のは、Ⅲの段階からであり、「小さいく」という名詞に対して「手書きであり、絵書きである」という説明を加える注釈句になっている。

「タリ」や「ヤラ」も、細かい差はあるものの、主節に対する注釈句、文中の一要素に対する注釈句（修飾句）という段階を経て、現在のような並列形式へと発達したと見られる。このような共通した変遷過程を持つ他の形式に対して、ノ・ダノはどのように位置づけられるだろうか。

藤田（二〇〇〇）では、助詞「ト」による構文は、「いわば抽象的な述語句に対し、その具体的内実を照合する形で結びつける」ものであり、「何かのありさまを具体的―抽象的に二重に言う表現構造」であるとする。それは、(21 a) のような擬声語擬態語副詞による修飾構造から (21 b) のような引用構文の構造まで連続して捉えられる特徴であるという（七一頁）。

(21) a. 兎がびよんと跳ぶ。

b. 恵美子は今晚はと言った。

「ト」句が後続の動詞に対して具体的な内容を補充する要素として働くとするこの説は、並列形式の変遷を考える上では示唆的である。このように考えれば、「ト」句は、「タリ」、「ナリ」、「ヤラ」などが名詞や動詞の注釈句（修飾句）となるⅢの段階と平行して捉えられることが可能になる。ノは、「ト」句がもともⅢ段階に相当する機能を持っていたことよって、初めからこのⅢ段階においての発達が可能になったのだと考えられる。

このようにノ並列の出発点をⅢの段階に相当すると考えるならば、ノ並列にもⅣ段階への発達が予想されるが、これを示すものが、三節の終わりで触れた「ト」句の構文の延長としては説明できない名詞句になる用例である。ノ並列句と同じように名詞句へ発達したナリとの比較で考えてみよう。

ごく簡単に述べると、ナリ並列句が名詞を修飾するⅢ段階は、被修飾語である名詞句はある属性を表し、並列句はその属性に含まれる要素を列挙する、という関係になる。具体的な用例でいうと、(22 a) では「あいやけ」⁽¹⁾ Ⅵ（お前、わたし）、(22 b) では「處置」Ⅵ 下主人、首代金⁽²⁾、という関係が成り立っている。

(22) a. 御子息力弥殿に。娘小浪を云号致したからは。お前也私也。あいやけ同士、御遠慮に及ばぬ事。

(仮名手本忠臣蔵、三三五四)

b. 下主人なり首代金なり、處置を付けにやなりやせん。

(恋の花染、一一七)

Kinuhata (to appear) では、この現象に対し、集合論の観点から説明を加えている。一般的に、集合の表し方には二通りあるが、一つはその集合に含まれる要素を数え上げることによって表す方法 (A: {a, b, c}) であり、もう一つはその集合の属性で指す方法 (A: {x}) である。Ⅲ段階の用例は、並列句が前者の方法による表現、被修飾語である名詞句が後者の方法による表現にあたり、この集合の二つの表現を同時に行っている構造であると考える。この時、並列句とその被修飾語である名詞句は共指示関

係となり、並列句が被修飾語である名詞句に置き換わることで、並列句自体が名詞句相当の統語的な機能を持てるようになると思えられている。

では、ノ並列の名詞句への変化を具体的な用例で考えてみよう。ノ並列句が名詞句になる以前には、「トト（イウ）名詞」という連体修飾の例がある。

- (23) a. 詮議にあうて牢櫃の、繩にかゝるのといふ恥と、この恥とかへらるか。 (冥土の飛脚、一・一三三)
b. まりの茶の湯の十種香の会のと高上なことに日をついやして、 (軽口機嫌囊、七・一八九)

藤田(二〇〇〇)によれば、「AトイウB」という表現には、「山本という男」のように表すところが実質的に等しい二項を結ぶ用法があるが、これは「A(具体) || B(抽象)」の関係にある。「実験が成功したという事実」や「佐藤氏が帰ってきたという連絡」のような、内容補充的連体修飾も、基本的に「A(具体) || B(抽象)」という関係で、AとBは同格の関係で捉えられるという(四九〇頁)。このことから考えれば、(23a)では「牢櫃、繩にかかる(コト)、… || (恥)、(23b)では「まり、茶の湯、十種香の会、… || (高上なこと)」という関係となっていると言える。これは、先に述べたナリの(22)の例と全く同じ現象である。先に見たように室町末期には「AトイウB」という連体修飾の例が見られ、さらに名詞句の例が見られるようになるのは、江戸期の一七世紀末頃からである。したがって、ナリの皿からiv

へという変化と同様に、ノ並列句も、「具体的な要素の列挙」ト(イウ)「抽象的な名詞」という連体修飾構造(皿段階)を通して、ノ並列句自体が名詞句相当の機能を持てるようになった(iv段階)と考えられる。

以上のような点からすれば、ノ並列句は、「ト」の文法的機能に支えられながらも、「ナリ」、「タリ」、「ヤラ」などの他の形式と平行する変化の方向をもつものとして位置づけることができると言える。つまり、現代語において、例示並列形式と呼ばれているものは全て、一定の変化の方向性から体系的に捉えることができるのである。

五 まとめ

本稿では次のようなことを述べた。

- ① 室町期から江戸期にかけて、ノ並列句は「トト」句による構文的機能に支えられて発達した。

- ② ノ並列は他の例示並列形式と比べて異なった特徴をもつよううにみえるが、他の形式と共通する変化の方向性を有しており、体系的な位置づけが可能である。

統語的な機能を「ト」に依存するという点は、他の形式の変遷とは大きく異なる点であるが、この違いについて今回はほとんど考慮しなかった。

また、冒頭の(1e)にあげたような「スル」を伴って述語句となるような例については全く触れられなかった。これは、歴史

的に見ると、江戸期はもとより、明治期に至っても見られない用法であり、先に述べたように、現代語においても他の用法に比べるとそれほど多く用いられるものではない。したがって、これは現在進行形で変化しつつある用法であると考えられる。「ナリ」や「ヤラ」など他の形式においても、「スル」を伴った述語句への変化は、名詞句への変化ほど単純には捉えられず、問題のあるところである。他の例示並列形式の考察も含めて、これらの点については今後の課題としたい。

注

(1) 現代語では「ノ」は名詞に用いることができず、それ以外でも慣用句的な言い回しなどで用いられる傾向にあり、ダノに比べて生産性が低い。しかし、「ダノ」は「ノ」にコピュラの「ダ」が付いたものであり、形式化したのは比較的新しく明治期以降である。そのため、歴史的考察は、「ノ」が中心となるので、本稿では「ノ・ダノ」と表記することにする。

(2) ノの語彙的資源については、従来諸説あるが、概ね①連体助詞説、②準体助詞説、③終助詞説(間投助詞説)の三つに分けられる。本稿では、下に述べる理由から、①の立場を取りたい。並列形式としての「ノ」が見られるようになる室町中期から末期にかけて、特に「何ノカノ」という例が頻繁に見られるのであるが、この並列に使用されている指示詞カは、カ+連体助詞「ノ」が複合した「カノ」を除いてこの時期には既に衰退にしていることが指摘されている(李二〇〇二など参照)。その点からすると「何ノカノ」はもともと「何ノ、カノ」で、修飾される名詞の省略された形であると考えられる。したがって、この場合「ノ」の語

彙的資源は連体助詞「ノ」であると考えられる。

(3) ただし、この後は江戸中期までコピュラ+ノの例が見られないのは問題であるが、引用句である点などから並列形式のノと判断した。

(4) 引用句になる動詞には「言う」の他に「ぬかず」「申す」「おしやうらう」などがあるが、全て「言う」で代表させる(以下同様)。「ト」句を文法的にどのようなように見るか、という問題は、諸説議論のあるところだが、本稿では、典型的な発話・思考動詞で、かつ必須成分になっている「ト」句を引用句、それ以外の動詞で、基本的には必須成分でない「ト」句を副詞句と分類した(藤田二〇〇〇等参照)。

(5) 歴史的にどの段階で「ト」が省略可能になったのか、ということとを明らかにすることは難しいが、江戸期に既にわずかながらも「ト」が付かない例や「ト」の機能に依存しない名詞句が現れていることを考えると、比較的早い段階でその可能性はあったのかもしれない。

(6) 同じように、助詞「ト」による引用文から発達したと思われる形式に「ヤ」がある(此島一九六六参照)。寺村(一九九一)によれば、「じゃがいもやにんじんを買ってきてくれ」というと聞き手に迷いが生じ、それは「ヤ」に他の同類のものを推測させる例示の意味が含意されているからだという。この現象もまた、「ト」による引用表現と、例示の意味の関係を傍証するものの一つと言えよう。

(7) 婿と嫁、双方の親同士のこと。

(8) 江口(一九九八a)は現代語に見られる同様の構造を考察し、「不定的同格構文」と呼んでいる。

【使用テキスト】

史記抄、蒙求抄…抄物資料集成『史記抄』『毛詩抄、蒙求抄』（勉誠社）、天草版平家…『天草版平家物語対照本文及びび索引』（明治書院）近松浄瑠璃…新日本古典文学全集『近松門左衛門集』1、3（小学館）、虎明本…『大藏虎明本狂言集の研究』本文篇上中下、喃本類…喃本大系1、19（東京堂出版）、歌舞伎…歌舞伎台帳集成1、29（勉誠社）、洒落本…洒落本大成2、27（中央公論社）、人情本…人情本刊行会第十回『恋の花染、花曆封じ文』（人情本刊行会）、CD-ROM版新潮文庫明治の文豪（新潮社）

【参考文献】

岩田美穂（二〇〇七）「例示並列形式の歴史的変化—タリ・ナリを中心として—」『日本語の構造変化と文法化』（ひつじ書房）九三—一三頁

江口正（一九九八a）「日本語の間接疑問文の文法的位置付けについて—不定的同格要素として—」九大言語学研究室報告一九、五—二四頁

——（一九九八b）「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」愛知県立大学外国語学部紀要三〇、三二五—三四四頁

鎌田修（二〇〇〇）『日本語の引用』（ひつじ書房）

衣畑智秀（二〇〇七）「付加節から取り立てへの歴史変化の2つのパターン」『日本語の構造変化と文法化』（ひつじ書房）六五—九一頁

此島正年（一九六六）『国語助詞の研究』（桜楓社）

鈴木智美（二〇〇四）「「くだのくだの」の意味」日本語教育一二二、六六—七五頁

砂川有里子（一九八八）「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」文芸言語研究言語篇（筑波大学）一三、七三—九一

頁

手塚知子（一九六八）「並立助詞「の」から「だの」へ—上接する異なる要素の相互干渉による変遷—」国文学言語と文芸（東京教育大学）五九—七、六一—七一頁

寺村秀夫（一九八四）「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモ—の場合—」日本語学三二—八、六七—七四頁

——（一九九二）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』（くろしお出版）

版）

藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』（和泉書院）

南不二男（一九七四）『現代日本語の構造』（大修館書店）

森山卓郎（一九九五）「並列述語構文考—たり・とか・か・なりの意味、用法をめぐって—」『複文の研究』下（くろしお出版）一二—七—一四九頁

李 長波（二〇〇二）『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会

Kinuhata, Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Egnuchi, and Satoshi Kinsui (to appear) 'Genesis of 'exemplification' in Japanese' Japanese / Korean Linguistics Vol. 16, ed. by Y. Takubo et al. Stanford: CSLI.

——